

もくじ	
▽第 75 回大会終了報告	16
▽第 76 回大会案内	17
▽P A デザイン	17
▽科研情報	18
▽学会各賞授与	18
▽From Editors	23

【第 75 回千葉大会終了報告】

下村 義弘（千葉大学大学院工学研究院）

2017年6月24日（土）と25日（日）の両日にわたり、日本生理人類学会第75回大会が千葉大学で開催されました。約130名のご参加をいただき、2つの研究部会開催と18の企業・団体からのご支援を受け、盛会のうちに終わることができました。この場をお借りして、皆様に感謝申し上げます。小職が大会長をお引き受けすることとなった発端は、前々回大会の際に、理事会の懇親会に向かう途中で勝浦先生にお声かけ頂いたことでした。大変恐れ多いと思うと同時に、ある問題に対して正面から臨んでみたい、という気持ちが浮かびました。その問題とは、生理人類学とデザインの関係がはっきりしていないように見えた、という至極個人的な問題でした。いままで、デザインに対して声高に物申した大会があったらどうか、と疑問を持ったのです。そしてテーマは、「デザインと生理人類学」に即、決まりました。



勝浦哲夫先生の特別講演とシンポジウムの模様

勝浦哲夫先生（千葉大学名誉教授）の特別講演「人工光環境と生理人類学」は、700万年かけて自然環境に適応してきた人類と、その歴史のなかで一瞬にして構築された人工環境の紹介から始まりました。LED（発光ダイオード）のスペクトルや発光制御方法とヒトの生理機能の関連につ

いて、実験データを中心にわかりやすくお話いただきました。ヒトの機能に矛盾しない人工環境を目指すべきとするコンセプトを詳しく伺うことができ、会場から喝采をいただきました。実は、勝浦先生のご講演は私がかねてより希望していたもので、実現して最も喜んでいたのは大会長自身だったかもしれません。そして大会企画シンポジウム「デザインと生理人類学」では、フロアとのやり取りの中で非常に深い討論を行うことができました。山中晶子先生（ブライト・ソレイルズ株式会社代表取締役）からは障害者福祉や、他の人が患者の立場になることが容易ではない内部疾患の視点から、人間を中心としたデザインの必要性について熱くご講演頂きました。兪文偉先生（千葉大学フロンティア医工学センター教授）からは人間と機械の双方がともに適応し一体化してゆくシステムについて、設計方法論から実例まで具体的に伺いました。増島麻里子先生（千葉大学大学院看護学研究科准教授）からは終末期の患者や家族の生き方を支えるために、死への臨み方をシミュレーションするという全く新しい方法の概念から開発の現状までを伺いました。村上武志先生（千葉大学学術研究推進機構 産業連携アソシエイト）からは産学官連携の成功事例を交えながら、知識や技術が充実し境界領域化してきた中で、特許や意匠といった産業財産権が研究者と産業界を強力につなぐプロトコルとなるということをお示しいただきました。

製品や環境のデザインは暮らしをよくするためのものであり、もともとユーザを分け隔てるものではありません。様々な健康状態や世代、社会的状態にあるヒトを相手にするものです。そのためヒトがもつ普遍的な特徴、すなわち脳の可塑性

や全身的協関、機能的潜在性と、モノの静的・動的適応設計がデザインの中心的方法論となることが予想されます。さらにヒトの死を含む生涯を通してこの方法論をとることで、世代を超えて暮らしをよくするデザインの発想が可能になると考えられます。このようなデザインは人間そのものを一貫して幅広くとらえる科学的知見と、社会的使命に向けた産業界の行動力がマッチしたときに具体化すると、確信しました。私たち生理人類学者には、デザインにおける重要な使命があると痛感する大会となりました。



懇親会の模様と75回大会ロゴマーク

懇親会は 90 名近いご参加を頂き、草野洋介先生の名司会と石橋圭太先生のおいしい日本酒、音楽や和太鼓が盛りだくさんの、賑やかなひと時とすることができました。この場をお借りして、第 75 回大会にご参加、ご協力下さった全ての皆様に深く感謝申し上げます。有難うございました。



事務局企画展示とスタッフメンバー

【第 76 回京都大会々告】

若村 智子 (京都大学)

来る 2017 年 11 月 18 日 (土)・19 日 (日) に、京都大学医学部創立百周年記念施設芝欄会館 (稲盛・山内ホール) で開催される日本生理人類学会第 76 回大会についてお知らせします。演題・参加申し込み方法の詳細は、学会ホームページの大会案内にも随時アップデートしておりますので、下記の URL を御覧下さい。

「<http://jspa.net/congress76>」

本大会では、11 月 18 日は、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻・十一元三先生による「自閉スペクトラムから、定型発達を考える～人類の主流派の特徴とは～」と題する特別講演があります。19 日は、やはり本専攻の上久保靖彦先

生に世話人をお願いした「癌と人類学・そして人材育成モデルの構築を目指して」のシンポジウムがあります。懇親会は、時計台キャンパスのカフェレストラン・カンフォアです。



会場の芝欄会館

演題申し込みは 9 月 25 日 (月) まで、抄録提出および参加申し込み (発表なし) は、10 月 13 日 (金) までです。多くのご参加、ご発表をお待ちしております。特に大会期間の 11 月中旬は、紅葉シーズンと重なるため、例年多くの観光客が国内外から京都に押し寄せます。このため宿の予約はお早めをお願い申し上げます。既に一部の宿泊予約サイトでは京都市内での宿の確保が難しくなっていると聞いております。その場合は大津 (滋賀県) や大阪 (大阪府) を含む京阪電鉄沿線まで広げて御検討ください。

【PA デザイン】

岡田 明 (大阪市立大)

向江 秀之 (豊田中央研)



生理人類学的な視点や研究成果をヒトの暮らしや社会の発展・改善に活用したデザインがあれば、それを PA デザイン賞に応募しませんか？

“PA デザイン”とは、ヒトの生理的特性を理解し、その知識やデータを活用して人工物や人工環境、ライフスタイルを創出することをいいます。この優れた事例に対して PA デザイン賞を授与す

ることで、ユーザーであるヒトの生理的特性を重視する科学技術の発展を促し、真に健康で快適かつ感性豊かな生活環境の構築に貢献することを目的としています。

募集対象は、工業製品や生活環境に限らず、生活習慣や社会の制度・サービスなど幅広く対象としています。正会員、賛助会員であれば無料で申請ができます。詳細はホームページをご参照ください。→「http://jspa.net/pa_design」お問い合わせは pa-design@jspa.net 迄お願いします。

【科研費審査システム改革 2018 について】

北村 真吾（国立精神・神経医療研究センター）
工藤 奨（九州大学）

1. 科研費審査制度の大幅変更

今年秋に募集が行われる来年度（2018 年度）科研費申請より、いよいよ新審査制度が全面的に導入されます。

これまで「系・分野・分科・細目表」に基づき細目ごとに審査が行われてきましたが、新制度では、研究種目に応じて「大区分（11 区分：基盤研究 S）」「中区分（65 区分：基盤研究 A・挑戦的研究）」「小区分（306 区分：基盤研究 B・C、若手研究）」の審査区分により、広い視点での審査が行われるようになります。また、従来は異なる審査員が 2 段階の審査を担当していたのに対して、新制度では、同一の審査員による「2 段階書面審査」（基盤研究 B・C、若手研究）、「総合審査」（基盤研究 S・A、挑戦的研究）が実施されることとなります。そのため、時間をかけた丁寧な審査が期待されています。改革の詳細については下記の科研費サイトを参照ください。以下、特に御留意頂きたい点についてご紹介します。

http://www.mext.go.jp/a_menu/shinkou/hojyo/1362786.htm

2. 若手研究 A・B の制度変更

従来は若手研究 A（最大 3000 万円）と若手研究 B（同 500 万円）の二種類がありましたが、若手研究 A が廃止され、若手研究 B に相当する「若手研究」のみとなりました。また、対象者の条件が「39 歳以下」から「博士号取得後 8 年未満」に変更されました。ただし、平成 30 年度申請では経過措置として採択時に学位がなくても 39 歳以下であれば応募可能です（学位取得後 8 年を超えていると 39 歳以下でも応募不可ですが、学位取得後 8 年未満であれば 40 歳以上でも応募可能）。

3. 若手研究 B の複数細目審査が廃止

若手研究 B で行われていた、複数細目での審査は、審査区分の変更に伴い過度な細分化が解消されたとして廃止されました。

4. 挑戦的萌芽研究が挑戦的研究に変更

従来の挑戦的萌芽研究は、より挑戦的な研究種目にするため、挑戦的研究（開拓）（最大 2000 万円）と挑戦的研究（萌芽）（同 500 万円）に分離変更されました。採択された場合、充足率（申請額に対する助成額）がほぼ 100% となりますが、採択率は約 10% とこれまで以上に厳しく審査されます。 昨年の基準を参照すると、「開拓」は基盤研究 S・A、そして「萌芽」は基盤研究 S・A・B との重複応募が可能となりますが、基盤研究 B・C および若手研究と異なり、挑戦的研究は応用人類学小区分での審査は行われませんので、御留意願います。

これまでの「応用人類学」細目は「小区分 45060：応用人類学」として、引き続き新審査区分に位置付けられることになりました。本小区分の更なる発展のためにも、基盤研究 B・C、若手研究への申請を検討している会員の皆様におかれましては、是非とも応用人類学小区分への積極的な申請を宜しくお願い申し上げます。

【学会各賞授与・受賞者のことば】

第 75 回大会表彰式において、学会各賞が授与されました。授賞式での御写真と共に受賞された方々のお言葉を掲載致します。



左から優秀論文賞・安部恵代氏（長崎大）、優秀研究賞・工藤奨氏（九州大）、論文大賞・藤原勝夫氏（金沢学院大）、安河内会長、学会大賞・山崎和彦氏（実践女子大）、奨励賞・大下和茂氏（九州共立大）、奨励賞・八木崇行氏（総合研究大学院大学、宇野病院）

【学会大賞】

山崎 和彦 (実践女子大学)

本学会は発足 40 周年を迎える。歴史を掘り進めば、初期の地層に私の名が化石となっている筈である。しかし地層はその下にもある。進化には前適応というものがあって、先の時代の諸先生方による御尽力あってこそその歴史である。そうした方々の表彰が済んでいない。気がひけるが、この野郎はそろそろヤバイとみた方々のお計らいによるものと、お受け致すことにした。まことに有難うございます。

アカデミー賞で授与されるオスカーは、オスカメスカといえはオスである。重量は台座を含めて 3.86kg であるから、受賞者はオモカーとつぶやきながら嬉々として帰るのだろう。今回いただいた一式の寸法は縦 32×横 27×厚さ 10cm、総重量 2.59kg である。一升瓶をぶら下げて帰るようなものだ。八王子に着く頃には背中のコリが著しく、受賞後突然死症候群のことが胸をよぎった。オリンピックでメダルを授与するような具合が良いのではないか。光沢のあるリボンが胸元を飾れば壇上で映えるだろう。大量にこしらえてバラまくのがよいだろう。

副賞であるのか 1000 字のスペースをいただいたので、故横山真太郎先生について綴りたい。生意気言うなど叱られるだろうが、豪放かつ繊細な愛すべき人物であった。宴会があって自己紹介が終わる頃、私は「必殺技は何ですか」と茶々を入れた。機先を制して山崎昌廣先生が「顔よ顔！ケケケ」と発せられ、座は沸き、横山先生はキョトンとしておられた。年賀状の直筆の文字が美しかった。対極が古賀俊策先生である。アポロンのごとく端正にして文字は解読不能。

学会会場では舞台に向かって右側の前から 5 列目辺りに陣取っておられた。横山先生の霊が憑いたのか、私もその辺りが好きになった。誰彼構わず、容赦なく質問された。外国人研究者が最も困惑した日本人の一人だろう。会場に先生のお姿がないというのは何とも寂しい。

二十数年前、佐藤方彦先生が理事会で仰った。「我々はこれまで無理に無理を重ねてきたわけですが、今後さらにどのような新しい無理ができるのか。それを探さなければなりません」

以来、私は無理に無理を重ねて酒を飲み、新しい無理を探して珍しい酒を飲むよう心掛けているから、佐藤先生の教えには、ほぼ従っているように思う。

【論文大賞】

藤原 勝夫 (金沢学院大学)

日本生理人類学会の 2016 年度論文大賞を受賞できたことを、光栄に思う。受賞に際し、次の様なことが脳裏を過った。筑波大学博士課程修了時に、池上先生が、「立位姿勢と歩行に焦点を当て、一生かけて研究を続けなさい」と、仰ってくださった。何とか、この言葉を守って、研究を続けてきた。金沢大学に 31 年間在籍させていただいたが、その中で一大転機があった。それは、教養部解体で、医学部に転属したことである。それは、医学部長の山本長三郎先生の「研究さえしてもらえれば、後は要望がない」の一言で転属を決意した。充実した研究環境（研究時間、研究施設、大学院生）を得ることができた。ここで一番の驚きは、英語論文のみが業績としてカウントされるということであった。おかげで 80 本ほどの英語論文を世に出すことができた。ただし、未だにできていないことがある。英文を和訳せずに理解することである。それゆえに、論文を読むのに多大の時間を要している。研究を遂行していく上でポイントになったことある。それは、20 名の大学院生と研究をともにできたことである。実に多くの時間を、研究に当てることができたのは、この時期である。退職年齢（65 歳）まで 4 年となり、この大学院生を採用することができなくなった。そこで思い切って、大学を移ることにした。古巣のスポーツの研究分野で仕事をしたかったことも理由の一つである。転勤した金沢学院大学では、金沢大学と同じ広さの実験室を準備して頂いた。

これまでの研究を通じて解ったこと、感じたことが、幾つかある。若手の研究者に参考なればと思ひ、それを列挙する。

- ・ 立とうとする意志がなくなると、立位姿勢が崩れる。身体的位置関係を最もよく変えられるのは、腰部（下肢と体幹）の前後角である。
- ・ 頸部の前屈姿勢には、中枢神経系を賦活させる作用がある。その賦活作用は、特に大脳皮質を持続的に働かせる時に、強い。
- ・ 皮膚は、無数の感覚器が存在するスーツであり、意味づけされた感覚地図帳が脳に保存されている。
- ・ 運動は、現在の立位位置の知覚に基づいて、運動によって到達する位置でもたらされる感覚情報を予測して遂行される。
- ・ 姿勢筋の中で、前面と後面の筋の活動交代が頻繁に起きるのは膝関節回りの筋である。足関節周りの筋は、後面筋が持続的に活動している。股関節周りの筋の活動には、大きな個

人差が認められる。高齢者は、足関節を主軸とした前傾・後傾運動を遂行し難く、股関節が主軸となる。

- ・ 膝屈伸運動が独り立ちする時期が近づくと、頻繁に観察されるようになる。この運動によって、身体重心の高さを容易に、しかも大きく変えることができる。
- ・ 注意分散機能が、高齢になるにつれて衰える。立位以外に注意が強く向けられた場合に、転倒することが多く認められる。注意を向ける必要のある姿勢制御は、自動化されていない。

【優秀研究賞】

工藤 奨 (九州大学)

この度は、栄誉ある日本生理人類学会優秀研究賞を賜り光栄に存じます。本賞を頂くことができましたのも、研究室のスタッフ、学生、卒業生の功績のおかげです。誌面をお借りして感謝の意を表します。

九州大学で開催された第 49 回大会に初めて参加して以来、15 年近くが過ぎていたことに改めて時がたつのが早いと感じております。私が入会した当時は、生理人類学そのものや 5 つのキーワードについての議論が大変盛んな時期であったことを思い出します。泊まり込みの合宿などで、末席ではありましたが多くの先生方のお考えを聞くことができたことは、私にとって大変すばらしい財産となっております。その当時、細胞の研究一辺倒で、研究に行き詰っていた時期でもありました。学問を深掘りするためには、周辺を広げないと深くないよという佐藤方彦先生のお言葉は、いろんなことに挑戦する勇気を与えてくださり、今なお深く胸に刻まれております。

研究を進めていくには、洞察力と俯瞰力の二つが必要であると感じています。ある一部分を深く掘り下げていったとしても、壁にあたり行き詰ります。俯瞰することで、違う分野や観点から解決方法があったりします。今、必死に取り組んでいること以外に目を向けることは、勇気が必要で難しいことだと思います。一見、関係がないようなことも、自分自身の役に立つという視点で物事に取り組むと、非常に良い循環となり、最後は自分のためになると思います。

ヒトを理解するという事は、究極の課題であります。果敢に挑戦していくためには深い洞察と俯瞰できる幅広い知識が必要です。研究者個人で、それらを蓄積していくことは時間がかかり大

変な作業になりますが、学会全体で知識を共有しながらヒトの理解を深めていけたらと思っています。今後も自分自身の研究が少しでも本学会に貢献できるよう努めてまいりたいと思います。この度は、本当にありがとうございました。

【優秀論文賞】

安部 恵代 (長崎大学)

この度は、2017 年度日本生理人類学会優秀論文賞という名誉ある賞を賜りまして、大変光栄に存じます。ご選考いただきました学会関係者各位には、心より感謝申し上げます。

賞を頂きました論文は、地域在住中高齢男女 1097 名を対象に、平地を 100m 歩くことにおける困難の自覚と超音波法による踵骨骨量、骨吸収マーカーとの関連を見たものです。男女とも歩行困難は、骨量低下と関連していましたが、骨吸収マーカー上昇との関連は、女性のみに見られ、男女による歩行困難の骨代謝への影響が異なる可能性が示唆されました。近年、男性における骨粗鬆症がクローズアップされてきていますが、男女では、骨粗鬆症、骨折予防に向けて、異なるアプローチが必要な可能性があるのかもしれない。

私が所属している長崎大学医学部公衆衛生学分野では、青柳教授のもと長年にわたり、地域在住高齢者を対象にした、骨粗鬆症を含めた筋骨格系疾患に関する調査を、長崎県内各地にて行い、骨量、骨折、変形性関節症、転倒、転倒恐怖感などに関する研究成果を発信してきました。本研究もその一環のものです。現在、五島市における、前向きコホート研究に参加しており、骨折発生に関連する様々な要因の解明につなげていきたいと考えています。また、国立がん研究センター主導の多目的コホート研究 (JPHC Study) にも参加しており、昨年ベースライン調査を完了いたしました。これからますます忙しくなりそうで、楽しみです。こういった一般住民における骨粗鬆症、骨折、生活習慣病などの特性に関する研究は、人類始まって以来の高齢社会において、生理人類学的にも有意義な知見につながっていくのではないかと考えています。

今回の受賞を励みに、これからさらに、研究成果を発信し、生理人類学の発展に貢献できるよう、教室員一同、ますます努力していきたいと思っております。

【奨励賞】

大下 和茂 (九州共立大学)

この度は、本学会の英文誌「Journal of Physiological Anthropology」に掲載された論文「Effect and immediately after-effect of lightly gripping to the cane on postural sway」に対し、2016年度論文奨励賞の栄誉を賜り、誠にありがとうございます。本論文を推薦していただきました英文誌編集委員の先生方、奨励賞へ選定いただきました日本生理人類学会の皆様にご報告申し上げます。

私は、神戸大学で学位を取得後、現在の九州共立大学に着任しました。今回の研究は、初めて個人の研究室を持ち、そこで行ってきたものであり、その内容が評価されたことを、大変光栄に感じます。

今回の論文は、触覚入力ヒトの姿勢動揺に与える影響を検討したものです。立位時に力学的には身体を支えられない程度の小さな力で固定物に触れる事によって、姿勢動揺が低下すると報告されています。これは、ライトタッチ効果と呼ばれており、身体各部位の相対的な位置関係の変化が触覚を通して把握できるため、姿勢制御が行いやすくなると考えられています。我々は、このライトタッチ効果を日常で活かす方法を検討しており、論文では、杖へのライトタッチ効果について報告しました。また、ライトタッチ効果が運動学習に繋がる可能性も示唆しています。運動を学習の際、視覚によって運動制御しながら学習する方法と比べて、他の感覚（聴覚）を使用した方が、学習効果は高いと言われております。触覚（ライトタッチ効果）による学習効果がどれほどかは、今後、検討を加える必要がありますが、今回は、杖が単に身体を支えるだけの道具ではなく、使い方によっては姿勢制御が向上するのではないかと示唆しました。

そして、現在は、このライトタッチ効果を立位姿勢制御だけでなく、ヒトの生活の中で活かす方法を検討しております。触覚を活用している例として、鳶職人が着用している鳶服があります。末端の広がったズボンは作業時に邪魔となりそうですが、広がった末端の布を介して周囲の環境や風の抵抗が感じられるようになっていると言われております。そこで、我々の普段身につけている衣類も、形状によっては触覚入力のツールとなり、ヒトの動作に好影響を与えるのではないかとする視点で、現在、研究を進めております。これらの成果は、近々、皆様にご報告できればと思います。

最後になりましたが、この研究に協力いただいた、関係者に感謝の意を表します。そして、近い将来、優秀論文賞や論文大賞にも選考いただけるよう、今後も研究活動に励むとともに、本学会の発展に協力出来ればと思っております。

【奨励賞】

八木 崇行 (総合研究大学院大学, 宇野病院)

この度、平成28年度日本生理人類学会論文奨励賞を頂き、誠に光栄に存じます。

私は、病院で患者さんに対して、理学療法士として理学療法を提供しています。その中で、体幹部の重要性をしばしば感じています。ヒトの身体構造において、体幹部、特にS字カーブを描く脊柱の後弯部にあたる胸椎が運動性を確保しつつ、安定する機能を果たすことで、頸椎および腰椎の可動性が維持できます。このため、体幹部は姿勢制御において重要な役割を果たすのです。しかしながら、従来の姿勢制御研究では、足関節や股関節を軸としたモデルが多く提案されており、体幹内の運動までは十分に検討されていませんでした。当該論文「立体角を用いた若年者、高齢者、脳卒中患者の静止立位制御モデル(日本生理人類学会誌20巻2号掲載)」では、若年者、高齢者、脳卒中患者を対象として、この体幹内における制御を含めた静止立位制御モデルを提案しました。そして、体幹内における制御の重要性を示唆することができたと考えています。このような知見を積み重ねることにより、生理人類学の発展、リハビリテーション学の発展に少しでも貢献していければと考えています。

今回のデータは、私が普段、勤務させていただいている宇野病院で収集したものになります。データ収集においては、宇野病院へ入院されていた患者さんやそのご家族、リハビリテーション部スタッフの協力をいただきました。心より感謝申し上げます。また、論文として発表できるまで粘り強くご指導をいただきました富田昌夫先生(藤田保健衛生大学)、古山宣洋先生(早稲田大学)、沢田護様(株式会社デンソー)、日頃から研究に関して相談にのっていただいた遠松哲志先生、高田勇先生に深く感謝申し上げます。今後も研究を継続し、よりよい報告ができるよう努力してまいります。

【JPA Best Reviewer 賞】

山田 クリス孝介（佐賀大学）

この度、名誉な Best Reviewer Award 2016 を賜りました。この栄えある賞に私を選出いただきました英文誌編集委員会の皆様、学会長はじめ学会運営に携わる方々、これまでお世話になって参りました諸先生に感謝申し上げます。特に、論文投稿者の方々と編集委員会の皆様には、査読者として活動できる機会を賜りました。この場を借りて御礼申し上げます。

この賞を賜り、投稿者と査読者としてのそれぞれの最初の経験を思い出しました。最初の経験は両方とも苦勞の多いものでしたが、今の私にとって非常に貴重な経験だったことは間違いありません。それ以降、幸いにも査読活動を継続することができ、このような名誉な賞を賜ったことに、この上ない喜びを感じるとともに、身の引き締まる思いです。これからもこの賞の名に恥じないような査読を心がけ、精進して参ります。この度は誠にありがとうございました。



JPA Best Reviewer 賞受賞の山田クリス孝介氏（佐賀大学）。同賞は *Journal of Physiological Anthropology* を刊行する BioMed Central 社より贈られます。

【74 回大会優秀発表賞授与】

第 75 回大会懇親会において、昨秋の第 74 回和倉温泉大会で優秀発表賞に選定された御三方に安河内学会々長から優秀発表賞が授与されました。受賞者および御指導に当たられた先生方の御写真と共に受賞者のお言葉を掲載します。



前列左から池田悠稀さん（九州大大学院博士課程在学中）、長野央歩さん代理（長野さんは本年3月長崎大大学院修了）、石郷岡拓哉さん（千葉大大学院博士課程在学中）。後列左から樋口重和氏（池田さんの指導教官）、田井村明博氏（長野さんの指導教官）、下村義弘氏（石郷岡さんの指導教官）、安河内朗会長。

【感情プライミング効果と個人の情動伝染特性の関連】

池田 悠稀（九州大学大学院）

この度は第 74 回大会優秀発表賞をいただき、大変光榮に思います。この場をお借りして、ご指導いただいた樋口重和先生、ユーザー感性学専攻の先生方、そして本研究にご協力いただいた方々に感謝申し上げます。

今回発表させていただいた研究は、感情を表出する声（笑い声）を聞いた後に顔表情知覚時のミラーシステムの活動がどのように変化するか、またそのミラーシステム活動の変化が、個人の情動伝染特性（他者からの情動伝染の起こりやすさ）と関連がするか調べたものです。学会直前までデータと向き合っており、結果をどう解釈するか考えておりました。悩みながらの発表でしたので、賞をいただくことができ驚いております。情動伝染といった共感、社会を形成し生存していくことにおいて重要な能力と言われております。共感反応の特徴や、共感の神経基盤ともいわれるミラーシステムについて調べることは、生理人類学研究の推進にもつながると考えております。

今後の研究が生理人類学会の発展の一助となるよう、一層努力していきたいと思っております。ありがとうございました。

【低温の人工炭酸泉浴における浸漬部位の違いが体温調節反応に及ぼす影響】

長野 央歩（長崎大学大学院）

この度は、このような名誉ある賞を賜り、大変光栄に思っております。何よりもまず本研究に協力して下さった被験者の皆様に心より感謝申し上げます。また、研究室の皆様や本研究に関わりご指導くださった全ての皆様に感謝いたします。本研究は、低温の人工炭酸泉浴が浸漬部の皮膚血管収縮を抑制し皮膚血流を維持することで効率よく身体冷却できる可能性を示唆した先行研究に着目し、人工炭酸泉浴の浸漬部位の違いが体温調節反応に及ぼす影響について検討することを目的としたものでした。近年の熱中症による救急搬送者数の多さは深刻な問題であり、本研究を進めることで低温の人工炭酸泉浴が夏季における運動や労働の休憩時間に行える効果的な熱中症対策の一つとして提案できると考えました。私自身は今年度の4月から一般企業に就職し研究とは離れてしまいましたが、本研究はまだ検討を深めるべき点も多くあります。幸いにも、研究室の後輩のみなさんが本研究を引き継ぎ、すでに新たな実験に取り組みられています。今後とも、皆様の温かいご指導をよろしくお願いいたします。

【道具の柄の柔軟さが操作時の筋活動に与える影響】

石郷岡 拓哉（千葉大学大学院）

私の「道具の柄の柔軟さが操作時の筋活動に与える影響」という研究では、道具の使用時に手の圧覚受容器から力覚フィードバックを得て高いパフォーマンスを維持すべく、柔軟な柄では握力を、柔軟でない柄では手関節の運動を使うなどして力のコントロール方法を変えることが示唆されました。ヒトがあらゆる道具を使いこなせる理由は、このように道具に応じ身体の制御方法を無意識に変化させられるヒト自身の可塑性にあるのだなと感じます。

本研究は私の卒業論文で、初めて論文に触れて実験計画や考察に取り組み、研究という新たな世界を覗いた思い入れの深いものでした。特に実験器具は試行錯誤の繰り返しで、一晩中3Dプリンタに向き合うこともありました。抄録や論文が行き詰まった時にはモデリングの練習と称し、流行りのオモチャやガチャガチャの景品を作って息抜きをしたことも記憶に新しいです。

この研究を日本生理人類学会第74回大会にてポスター発表し、名誉ある賞を頂けたことを大変光栄に思います。ご選考いただきました関係者の方々、幾度も力強い助言や温かい励ましのお言葉を下さった下村義弘先生、私の所属する人間生活工学研究室の皆様がこの場を借りて心より感謝申し上げます。この賞を励みに、道具を使うヒトの姿をさらに深く考察できる研究を今後も続けたいと考えております。

【学会動静】

□大会予定

- ・第76回大会：2017年11月18-19日、京都大学
- ・第77回大会：2018年6月16-17日、九州大学
- ・第78回大会：2018年10月下旬予定、東京大学

from Editors

次号No.4の原稿締切は2017年10月25日です

▽初めて単独で編集作業を行いました。予想を遙かに超え、編集作業全体で合計124本の電子メールを送信することになり、我ながら作業効率の悪さに呆れています。何とか8頁以内に責了し、和文誌と同時デリバリーできることにホッとしております。御寄稿の執筆依頼に快く応じて頂きました執筆者の皆様には厚く御礼申し上げます。

▽PANews 編集事務局

安陪大治郎 九州産業大学 健康・スポーツ科学センター
メールアドレス panews@jspa.net

※原稿、お問い合わせなどはこのメールアドレス宛にお送りください。